

## 「自然観の役割—人間と自然の共生を求めて」

東洋大学文学部 竹村牧男

3・11の東日本大震災は、未曾有の被害をもたらし、日本の社会の根幹を揺るがす事態となった。加えて深刻な問題を引き起こしたのが、原発事故であった。想定外の事態が現実起きたことにより、人間が人間の知性で自然を完全に支配することはできないということを、あらためて認識させられた。地球社会のサステナビリティの危機が強く露呈し、文明の転換を強く促すものともなった。

この事態には、科学の陥穽が明瞭になったと見ることができる。自然科学は、自然を対象に置いて、これを要素に分割し、そのうえで操作・支配するという特質を有している。その立場は、対象を追いかけてやまないことにより主観ないし自己の側を見失い、ただ肥大していく欲望の充足の追求に人々を追い立てて行った。自己の生きる意味は不問に付され、精神的な価値は軽視され、物質的な豊かさへの執着のみをつのらせる結果となった。

ここに、科学の方向性を主導する哲学の欠如の問題を指摘することができよう。サイエンスが人間にとって真に意義深いものとなるには、その根底に生きる意味や達成すべき精神的価値、実現すべき美意識等が自覚されていなければならない。人間観・自然観・世界観が問われる所以である。

特に自然環境の汚染・破壊という現実に対しては、単なる自然愛にとどまるのではなく、確かな自然観を自覚し、そこからあるべき生き方を確立していくことが重要である。自然は人間にとっての対象ではない。人間がそこにおいて生きる場であり、人間と自然環境は一組のものとして考察していくべきである。つまり自然は人間の生を支える基盤として、人間とは切り離せない、人間と一体のものとするべきものである。

仏教の唯識思想においては、環境と身体とは心が維持しているのであり、その基盤の中で自己のいのちがあるという。天台本覚法門などにおいては、その環境と自己とは本来仏のいのちそのものであるとさえ説く。

地球社会のサステナビリティの問題に関する哲学としては、環境倫理とりわけ世代間倫理が重視されるべきである。今は存在しない未来世代に対する責任をどのように論理的に説明できるかが世代間倫理の核心のようであるが、未来世代への共感・共苦という、感情を基盤とする倫理もありえないであろうか。ひるがえって現在の同世代の他者に対しても、そのいのちの十全な実現に配慮すべきであることを忘れてはならない。とすれば我々は、自然との共生、同世代の他者との共生、未来世代の自然と他者との共生、について、深く考えていくべきである。そうした中で、ライフスタイルの理念をも得ることができ、さらにその実践の具体的な方途が探究されることになる。

こうしてみれば、自然観の明瞭な自覚は、人間観（他者へのまなざし）の明瞭な自覚をも招き、ひいてはサステナビリティのための倫理とその具体的な実践を導くことにつながっていて、きわめて重要であることを思うべきである。

## 自然観の役割——人間と自然の共生を求めて（資料）

### 1

「日本では、キリスト教以前のヨーロッパと同じように、自然は神聖なものと考えられた。……けれどもこうした自然崇拜と、これに結びつく精神、つまり最も繊細なしかたで自然を観想することを好む精神が、何よりもまず目・鼻・耳に不快感をもたらすあの日本の工業文明を阻止しなかったのである。」（パスモア『自然に対する人間の責任』、岩波現代選書、1979年）

### 2

「日本人にとって、自然とは、われわれがそこから生れた母であり、無限の恩恵を、われわれに与えるものであった。このような自然への無限の甘えをもった日本人が、西洋文明に内在する自然支配の思想をうけ入れるとき、事態は、はなはだ悪くなったのである。つまり、日本人は、自然をいくら虐待しても、なおかつわれわれに無限の恩恵を与えてくれる母と考えたからである。……私は、この点に、自然愛好国民の日本人が明治以後、もつともはなはだしい自然虐殺者になった秘密があるのではないかと思われる。」

「今、世界的に、特に日本に起こっている現象は、このような自然の怒りなのであろうが、自然の怒りという感覚をもてない我等日本人は、依然として現在もなお自然に甘えつつ、自然支配を続けているのではないか。われわれが健康な自然観を回復するには、自然を人間の対立物と見るヨーロッパ的自然観の否定であるとともに、自然を、われわれのいかなる我意をも甘やかしてくれる永遠の母と考える従来の日本人の自然観の否定でなくてはならない。」（梅原猛『哲学の復興』、講談社現代新書、1972年）

### 3

唯識では、五感の識（眼・耳・鼻・舌・身）・第六意識・末那識・阿頼耶識の八識があると説く。人人唯識で、一人一人、八識である。各識には、その中に対象面が具わっており、もちろんそれを見る（知る）ものも具わっている。これを相分と見分という。例えば、眼識には色が相分に現われ、それを見分が見ているということになる。前五識には、それぞれ色・声・香・味・触が相分に現じることになる。意識には、一切のものが相分に現じえる。末那識には、常住の自我の相が現じて、常にこれに執着する。阿頼耶識にも相分はある。それは、有根身（身体）と器世間（環境世界）と種子（七転識の現行の因となるもの）とであるとされている。つまり簡単に言えば、心の中に身体と環境とが維持され、そこにおいて見たり聞いたりがなされる、その総体が一人の自己であるというのである。

4

「草木国土悉皆成仏」の思想は、主に天台宗において展開された。この思想の淵源は、天台智顛（538～597）の『摩訶止観』に出る、「一色一香無非中道」（一色一香中道に非ざる無し）にある。この言葉が、有情ではない非情にも仏性があるという思想を説くものとして受け止められ、のちの荊溪湛然（711～782）は、『止観輔行伝弘決』において、非情にも仏性があるということを強調している。

こうした中国天台教学を背景に、日本においては最澄（767～822）ののちに、この問題が大きく扱われていった。のちの宝地房証真（～1156～1207～）の『止観私記』には、「中陰経云、一仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏、身長丈六、光明遍照、其仏皆名、妙覚如来」とあるが、実際には『中陰経』にこうした句は見出されない。むしろこの句は日本で作られたものらしい。それは、お能の謡曲にもしばしば引用されるなどした。

天台宗の忠尋（1065～1138）作と伝える『漢光類聚』（実際は1200年以降のものらしい）には、なぜ「草木国土悉皆成仏」といえるかについて、「草木成仏に七重の不同有り」と示している。それを簡単に整理すると、次のようである。

- ① 自己の完成と自然の完成は連動している。（諸仏観見）
- ② 自然の一つ一つが、自己と自然を超える究極のいのちに貫かれている。（具法性理）
- ③ 自己と自然は、不二であり、切り離せない。（依正不二）
- ④ 自然の一つ一つは、それ自体において絶対的な価値を有している。（当体自性）
- ⑤ 自然の一つ一つは、もとより靈性的表現を持っている。（本具三身）
- ⑥ 本当の自然および自己は、言葉を離れている。（法性不思議）
- ⑦ 自然の一つ一つは、他のあらゆる存在と関係し、他を自己としている。（具中道）

5

人間の成長に応じ自己と他の存在との同一視・同一化が起こり、それゆえ自己が広がり、またその深みが増す。「他者のなかに自分を見る」ということが起こる。自分が同一化した相手の自己実現が妨げられると、自分自身の自己実現も妨げられてしまう。それゆえ、わたしたちの自己愛は他者の自己実現を助けるというかたちでも表われる。「みずから生き、他者も生かす」が原則になるのである。このように、愛他主義（義務的・倫理的に他者の利益を考慮すること）により達成されることはすべて、そしてそれ以上のことが、自己を広げ深めることで達成できる。カントの言葉を借りると、道徳や倫理に従う・従わないではなく、美しい行動をとるということである。（アラン・ドレクソン・井上有一共編、井上有一監訳『ディープ・エコロジー——生き方から考える環境の思想』、昭和堂、2001年）

6

関係主義はエコソフィからみると価値がある。なぜなら、関係主義は、生物や人間はそれらの風土や環境から切り離しのできるものだという信条を、容易に切り崩してくれるからである。生物と風土との相互作用について語ると、生物は相互作用だというような誤った連想を引き起こす。生物と風土とは二つの事物なのではない。もし一匹のねずみが全くの空虚に運びこまれたら、それはもうねずみでなくなるだろう。生物は風土を前提にしている。

同様に一個の人間は、人間が全体の場のなかでの関係的な接合点である、という意味では、自然の一部になっている。一体化の過程とは、この接合点を定めている諸関係が拡大して、ますます多くのものを含む過程である。自己 (self) が自己 (Self) に向かって成長する。(アルネ・ネス著、斎藤直輔・開 龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か——エコロジー・共同体・ライフスタイル』、ヴァリエ叢書4、文化書房博文社、1997年)

7

私たちと他の存在者との連帯について私たちがもっと理解するにつれ、一体化は進み、私たちはもっと配慮するようになる。これにより、他の存在の幸福を喜び、彼らに危害がふりかかった場合に悲しむようになる道が開かれる。私たちは私たち自身にとって最善であるものを求める。しかし自己の拡張を通じて、私自身にとっての最善がまた他の存在にとっての最善にもなっている。〈自分自身のものである—自分自身のものではない〉の区別は、文法上残るだけで、感情の面ではなくなる。

哲学的には、自我 (ego)・自己 (self)・自己 (Self: 深遠にして包括的なエコロジー的自己) の諸概念は、世界の諸宗教に元来は緊密に結びついている異なった体系に編み込まれている。現代の私たちの産業社会ではこれら宗教の影響力が低下したので、一体化の諸哲学はほとんど近づきたいものになってしまった。いろいろな種類の自発的な宗教体験の温床は、今ではその宗教の発祥地の文化的賜物ではなくなった。(同前)

8

アルネ・ネス「ディープ・エコロジー運動の支持者に見られる傾向の指摘」(ネス「ディープ・エコロジーとライフスタイル」、1983) から。

- ①質素な手段を用いる
- ②反消費主義をとる
- ③民族的・文化的な違いの価値を理解し、これを尊重する。
- ④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする
- ⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする
- ⑥自然のなかで生きることを心がけ、利益社会ではなく共同社会の発展に努める

- ⑦すべての生きものの真価を認め、これを尊重する
- ⑧身近な生態系の保護に努める
- ⑨人間が飼う動物と競合する野生生物を保護する
- ⑩非暴力などに基づく行動をとる（同時に肉食主義に向かう）
- ⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準でありあまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす
- ⑫どこでも、だれにでも実現可能な生活のあり方の真価を理解し、これを尊重する。このようなライフスタイルとは、他の人々や人間以外の生きものに対しても、不正を働くことなく維持できる可能性を持つ生活のあり方である。（前掲『ディープ・エコロジーとは何か——エコロジー・共同体・ライフスタイル』）